

日本 LD 学会第26回大会参加報告

江田良市

(発達障害教育推進センター)

要旨: 本稿では、日本LD学会第26回大会の参加報告を行う。本大会は、平成29年10月7日(土)から9日(月・祝)にかけて栃木県にある栃木県総合文化センターで開催された。「発達障害の人の社会参加—大人になって幸せになるために—」を大会テーマとし、特別講演や教育講演、大会企画シンポジウム、学会企画シンポジウム、研究委員会企画シンポジウム、全国LD親の会企画シンポジウム、自主シンポジウム、口頭発表、ポスター発表等の多彩なプログラムが企画された。国立特別支援教育総合研究所の研究者による活動状況としては、研究発表(自主シンポジウム・ポスター発表)を行った研究者が8名であった。また、本稿では、本大会の研究発表内容に関する情報提供を目的として、著者が参加した大会企画シンポジウムや教育講演、自主シンポジウムに関する概要を記した。

見出し語: 日本LD学会、大会報告、発達障害

I. 大会主旨について

1. 日本 LD 学会について

日本 LD 学会は、LD とその近隣概念をきちんと理解し、そうした状態にある人々への科学的で、適切な発達支援を考えるために、教育、心理、医療等に携わる専門家や教師、そして保護者によって、1992年に設立された学術研究団体である。本学会は、2009年4月1日に法人化され、「一般社団法人日本 LD 学会」となった。本学会の目的として、LD・ADHD等の発達障害に関する研究・臨床・教育の進歩向上を図ると共に、LD等を有する児(者)に対する教育の質的向上と福祉の増進を図ることが挙げられる。2017年4月1日現在の会員数は、正会員9,495名、名誉会員18名、機関会員47機関、賛助会員2機関である(日本 LD 学会, 2017a)。

2. 日本 LD 学会第 26 回大会について

日本 LD 学会第26回大会は、平成29年10月7日(土)～9日(月・祝)に開催された。本大会では、「発達障害の人の社会参加—大人になって幸せになるために—」を大会テーマとして開催された。本大会は、栃木県にある栃木県総合文化センターを会場とし、

国立大学法人宇都宮大学及び早稲田大学によって開催された。また、開催にあたり、S.E.N.S (Special Educational Needs Specialist ; 特別支援教育士)の会栃木支部会の協力を得た。

本大会では、発達障害のある子供が、学校を卒業し、社会に出て行き、就労や結婚、子育てといった大人になった後の生活において、幸せに暮らしていけるよう、学校教育早期からの教育支援を中心の話題とした。ASDを中心とする発達障害児者のトータルサポートの専門家であるアメリカの Laura Klinger 氏(ノースカロライナ大学)による特別公演が行われた。また、絵本と心の発達について、栃木県ゆかりの柳田邦男氏(ノンフィクション作家・評論家)による特別公演も行われた。その他には、大会企画シンポジウム、学会企画シンポジウム、研究委員会企画シンポジウム、全国 LD 親の会企画シンポジウム、教育講演、自主シンポジウム、口頭発表、ポスター発表等が実施された(日本 LD 学会, 2017b)。

II. 大会期間中の主なスケジュール

以下の内容は、日本 LD 学会第 26 回大会論文集(日本 LD 学会, 2017b)を参考に記した。

表1 日本LD学会第26回大会の主なスケジュール

	10月7日(土)	10月8日(日)	10月9日(月)
午前		<ul style="list-style-type: none"> ・学会企画シンポジウム:「高等学校における特別支援教育」 ・教育講演:「テクノロジー利用による合理的配慮」 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育講演:「地域における医療,教育,福祉の連携—途切れなき支援を目指して—」 ・大会企画シンポジウム:「Vygotsky における近くと行為と情動の統一体としての意味」 ・自主シンポジウム:「学校における認知機能向上のためのシステム導入」 ・学会企画シンポジウム:「高等学校における特別支援教育」
		<ul style="list-style-type: none"> ・大会企画シンポジウム:「発達障害の人の社会参加」 ・大会企画シンポジウム:「オノマトペ絵本での読み合い遊びと子どもの育ち」 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育講演:「発達障害:幼児期からの支援を考える」 ・大会企画シンポジウム:「不器用さのある子どもたち」 ・大会企画シンポジウム:「特別支援教育の視点を活かした授業づくり」
午後	<ul style="list-style-type: none"> ・大会会長講演:「発達障害の人が大人になって幸せになるために—ライフスキルの支援を—」 ・理事長講演:「日本LD学会の魅力と可能性(4)」 ・受賞者講演:「成人期のADHDに対する支援の発展に向けて」 ・特別講演①:「発達障害の人の社会参加—大人になって幸せになるために—」 ・教育講演①:「読み書き障害とその指導」 ・教育講演②:「発達障害のある子どもの育ち」 ・大会企画シンポジウム:「学校における専門職理解と連携」 ・全国LD親の会企画シンポジウム:「発達障害者の教育から就業への移行における課題」 ・自主シンポジウム 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別講演:「絵本と子どもの心の発達—デジタル化社会に溺れないために—」 ・教育講演:「大人の発達障害の課題と支援—中老期から老年期まで視野に入れて—」 ・教育講演:「WISC-IV検査結果と発達支援実践の橋渡し—つまずきの原因の理解と対応—」 ・国際委員会企画ラウンドテーブル:「英語によるラウンドテーブル」 ・自主シンポジウム ・ポスター発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育講演:「ASD と最新のTEACCH—エビデンスベーストプラクティスと融合の時代」 ・教育講演:「協調学習で子どもの声を聴く」 ・対談:「アサーションスキルと学級づくり」 ・研究委員会企画シンポジウム:「算数障害の理解と支援」 ・自主シンポジウム ・ポスター発表

大会1日目の10月7日(土)には、大会会長講演、理事長講演、受賞者講演、特別講演、大会企画シンポジウム、教育講演2件、全国LD親の会企画シンポジウム、自主シンポジウム9件、ポスター発表が設定され、それぞれ講演・発表・協議等が行われた。

大会2日目の10月8日(日)には、特別講演、教育講演3件、大会企画シンポジウム2件、学会企画シンポジウム、大会企画シンポジウム、国際委員会企画ラウンドテーブル、自主シンポジウム23件、ポスター発表が設定され、それぞれ講演・発表・協議等が行われた。

大会3日目の10月9日(月・祝)には、教育講演4件、大会企画シンポジウム3件、対談、自主シンポジウム15件、ポスター発表が設定され、それぞれ講演・発表・協議等が行われた。

以上をまとめると表1の通りとなる。この他にも、全国LD親の会によるポスター展示や、発達障害関連書籍等の展示・販売が行われた。

Ⅲ. 国立特別支援教育総合研究所の研究員による活動状況

本大会では、国立特別支援教育総合研究所(以下、当研究所とする)の研究員による研究発表も行われ、発達障害のある子供や大人に関する最新の研究知見について、参加者とのディスカッションを通して情報収集を行った。

特に、高等学校における通級による指導や発達障害のある児童生徒を含む通常の学級における学級全体への指導や支援については、参加者の関心も高く、活発な意見交換がなされた。

Ⅳ. 著者が参加した主なプログラムの概要

1. 大会会長講演「発達障害の人が大人になって幸せになるためにーライフスキルの支援をー」

本講演では、早稲田大学の梅永氏より、学校を卒業後、就労等の場において適応できにくい人たちの中に、LDやADHD、ASDといった発達障害の特性を持った人が多い状況を鑑み、成人期の発達障害者が抱える課題を検討し、「大人になって幸せになるた

めに」にはどのような支援が必要かについて論じられた(梅永, 2017)。

梅永氏からは、発達障害の子供が大人になって自立した生活を営むためには、小さいときから将来のことを考えた子育てや教育が必要であることが述べられ、必要な能力として「ハードスキル」(仕事そのものに必要な能力)と「ソフトスキル」(対人関係等、間接的に職業生活に影響する能力)、それぞれの課題や重要性が述べられた。そして、安定した就労を継続するためには、特に「ソフトスキル」を支える「ライフスキル」(職業生活を営む前段階での基本的な生活能力)が欠かせないことが説明され、今後、ライフスキルカウンセラー等の専門家の支援を受ける「援助つき自立(社会参加)」についての示唆もされた。

2. 教育講演「発達障害のある子どもの育ちー共に生きるかたちから見える育ちの必然ー」

本講演では、奈良女子大学の浜田氏より、特別支援教育をめぐる近年の状況を通して、多様な子供たちの育ちの中で「共同化」が衰退し、「共に生きるかたち」が失われつつあると感じられていることから、特別支援教育の在り方について提言がなされた(浜田, 2017)。

浜田氏からは、現在取り込まれることの多い「ソーシャルスキル」への指導や支援を例に挙げ、対人関係やコミュニケーションに苦手さがある場合、いろいろなトレーニング等を工夫し、少しでも生きやすくなる働きかけが行われるが、本来のソーシャルスキルは、「苦手さも引き受け、苦手なまま本人も周りの人も楽しめる」ことであり、人と一緒に「生きるかたち」をつくるという視点をもつことが重要であると述べられた。そして、ある力を身につけていくだけでなく、身につけた力を発揮できる場が用意されていること、子供たちが身につけた力を使って他者に喜んでもらえる場が用意されていることの大切さについても述べられた。

3. 学会企画シンポジウム「高等学校における特別支援教育ー多様な支援実践から高校段階のニーズを考えるー」

本シンポジウムでは、平成30年度から高等学校において通級による指導の運用が始まるにあたり、3名のシンポジスト（高等学校、教育センター、大学学生支援機構学生支援センター）を迎えて、発達障害のある生徒への支援の在り方や高等学校と大学との連携の課題等、高等学校における特別支援教育の在り方について考えることを目的とした（小野・岩田・比嘉・西村・柘植，2017）。

話題提供者による発表の概要は以下の通りであった。

京都府立田辺高等学校の岩田氏より、文部科学省のモデル事業において取り組んだ「ライフスキルトレーニング B」をもとに、指導の成果と課題について発表がなされた。成果としては、①コミュニケーション能力の高まり、②対処できる場面の増加、③積極的に取り組む意識の向上、④進路について具体的に考える意識の向上、が挙げられた。課題としては、①対象となる生徒の決定の在り方、②特別の教育課程編成の在り方、③自立活動の指導の専門性、④本人及び周囲の障害特性の理解、⑤進路先との連携、が挙げられた。

沖縄県総合教育センターの比嘉氏より、普通高校内に設置された高等特別支援学校の分教室における実践を通して、2つの学校が互いの教育的資源を活かし、意図的に多様な学びの場を校内につくることで、互いの生徒の成長がみられたことについて発表がなされた。具体的な成果として、部活動の参加や交流及び共同学習の機会が増え、多様で新しい学びの場が生まれたことやそれらを支える相談支援体制を整えることで障害に対する意識の変化がみられたことについて述べられた。

富山大学教育学部・学生支援機構学生支援センターの西村氏より、大学の学生支援センターでの大学生の支援を通して、高等学校との連携や高等学校での支援の課題について発表がなされた。具体的な取組として、①支援が必要な学生をスムーズに支援へつなぐための入学前相談、②進学を希望する高校生のための大学体験プログラム「チャレンジ・カレッジ」、③入学決定後に支援要請ができる機会の確保、について説明がなされた。また、発達障害のある大学生への支援として、「学修を支える支援」と「心理

教育的支援」の重要性を述べると共に、入学してくる学生自身の自己理解を深めるためには、高等学校で行われる特別支援教育と大学で行われる障害学生支援の考え方や支援の在り方について、双方の職員・支援者が協議し、連携する必要があることを述べられた。

指定討論者による発表の概要は以下の通りであった。筑波大学の柘植氏より、高等学校における取組を行う際に重要となる個別での支援と集団での支援との関係、自尊感情への配慮等が述べられた。各話題提供者には、自尊感情の確認の方法（岩田氏）、普通高校と高等特別支援学校との特色ある連携（比嘉氏）、個別の教育支援計画等の引継ぎ（西村氏）について質問が行われた。

4. 大会企画シンポジウム「発達障害の人の社会参加—大人になって幸せになるために—」

本シンポジウムでは、大人になった発達障害者が就労等の社会参加をする際の課題と支援方法について、3名のシンポジスト（保護者、大学関係者、就労支援担当者）を迎えて、成人期の支援の具体的対策について議論を深めることを目的とした（梅永・山岡・西村・井口・志賀・L.Klinger，2017）。

話題提供者による発表の概要は以下の通りであった。

NPO 法人全国 LD 親の会の山岡氏より、成人期の発達障害者の課題と支援について、①職業能力開発支援の拡充、②定着支援の拡充、③長期的・継続的な生活相談・支援の確立の観点から発表がなされた。具体的には、作業能力や体力と併せてコミュニケーション等の社会性を学べる場や相談支援ができる場が望まれると述べられた。また、心理面として、適切な自己理解や他者からの助言を受け入れられる安定した情緒の大切さとその支援について述べられた。

富山大学保健管理センターの西村氏より、大学の学生支援センターでの大学生の支援を通して、学生が自身の特性を知り、どのような配慮があれば自分にとってよりよい学修環境が保障されるのかを認識し、他者と協働する態度を身につけていくことの大切さについて発表がなされた。また、在学中も、卒業後も、本人が支援者や職場の人々との対話による

「自己理解と環境整備」を協働して導き出していくことが重要であるとし、就職活動支援に引き続き、卒業後は地域就労支援機関と連携しながらフォローアップ支援を継続していることについて説明がなされた。

東京都障害者職業センターの井口氏より、当センターを利用している中で割合の高い ASD の人の就職や職場適応の状況を踏まえ、支援の取組について発表がなされた。具体的には、①障害者職業カウンセラーによる職業相談（職業相談シートの作成や活用）、②職業評価（職場実習アセスメントシートの作成と活用）③職業準備支援（ナビゲーションブックの活用）等について説明がなされた。

指定討論者による発表の概要は以下の通りであった。

国立のぞみの園の志賀氏より、障害者雇用の状況と課題について、アメリカの L.Klinger 氏（ノースカロライナ大学）より、成人期において発達障害のある人にとって必要な力等について発表がなされ、各発表者への質問等を通して、重要な点として①本人の自己理解を促す人の必要性、②本人自身が意思表示や自己決定できるための支援、③不安や感情のコントロールができるような支援、等が挙げられた。

5. 特別講演「絵本と子どもの心の発達—デジタル化社会に溺れないために—」

本講演では、ノンフィクション作家・評論家の柳田邦男氏より、現代のデジタル化社会・ネット社会において、家族同士や友達同士のコミュニケーションが希薄となってきたことが人格形成に及ぼす影響について述べられ、生育期にある子供にとって絵本の読み聞かせが新たな意味を持つようになってきたことについて述べられた。実際に何冊かの絵本の読み聞かせをしながら、絵本の読み聞かせは、感情のこもった肉声とスキンシップ、読み手と聞き手の感情の共有などによって、言語力、感性、人間関係理解力、自己表現力などの発達をもたらすことについて説明された。また、読み聞かせの時間は、温もりのある時間・空間・感情の共有により、子供の心の安定がもたらされることについても述べられた。なお、紹介された絵本の中には、発達障害のある子供

への理解を促す絵本も数冊あった。

6. 大会企画シンポジウム「特別支援教育の視点を活かした授業づくり」

本シンポジウムでは、通常の学級の授業において特別支援教育の視点を取り入れることについて、2名のシンポジストを迎えて、支援を必要としている子供たちの授業参加のプロセスや集団としての学習の深まりについて取り上げ、授業の構造や教科としての本質と関連づけた観点から特別支援教育の授業づくりを捉え直すことを目的とした（司城・新井・岸野、2017）。

話題提供者による発表の概要は以下の通りであった。

茨城大学の新井氏より、特別支援教育の視点を活かした授業づくりとは何であるか、また学ぶことの本質とは何であったかを問い直し、アクティブ・ラーニングや学びの連続性の視点から、効果的な教授・学習の在り方について発表がなされた。具体的には、実際の教科（国語・算数・社会）の学習場面を取り上げ、学習の過程で生じている子供の心理状況を分析し、①「情動的交流」が学習の基盤であること、②学ぶ楽しさの中で、事象の意味や価値を知ること、③一人一人の発達、興味・関心や障害特性等に「いねい」に対応すること、によって子供が学びを発展させていくことができることについて述べられた。

福井大学大学院の岸野氏より、特別支援教育の視点を活かした授業づくりについて、個別の支援と集団への支援の関係を取り上げ、学ぶ過程において子供たちの関係が深まることの大切さについて発表がなされた。具体的には、①アクティブ・ラーニングの視点から一人一人が学びの必然性を感じるためには、まず個を丁寧にみることと教材解釈を「いねい」に行うこと、②個への支援から共同関係になる支援を行うことで参加を支えること、そのためには、③子供たち同士が、他者の立場に立って説明するなど、「共感」することができるサポートを行うこと、の重要性について述べられた。

7. 自主シンポジウム「学校における認知機能向上

のためのシステム導入ーコグトレ(COGET)を使った学校支援ー

本シンポジウムでは、5名のシンポジストを迎えて、小・中学校において認知機能の弱さが原因となり学習に困難さのある子供に対して、認知機能をアセスメントしたり、強化するトレーニングを行ったりする実践を通して、その成果や今後の課題を明らかにすることを目的とした(宮口・井阪・閑喜・島田・松浦・石附, 2017)。

和泉市立国府小学校の井阪氏及び梅花女子大学の閑喜氏より、「小学校でのコグトレ(認知機能強化トレーニング)によるアセスメントの施行」として、朝の会を利用してコグトレワークシートを用い5つの領域(覚える, 写す, 見つける, 数える, 想像する)について把握し、学習との関連を検討するとともに、認知機能を高めるための最適な施行プログラムを作成する取組について発表がなされた。

四日市市立西笹川中学校の島田氏及び三重大学の松浦氏より、「中学校でのコグトレによるアセスメントの施行」として、基礎学習タイムでのコグトレの実施、COGETワークシートによるアセスメントの実施を通して、生徒の認知面の弱さの改善が学習面や社会性の向上に繋がることについて発表がなされた。

広島大学学術員大学院の石附氏より、「作業療法におけるコグトレと臨床観察を併用したアセスメントの提案」として、事例を紹介しながら、コグトレのワークシートと臨床観察を併用したアセスメントの提案が行われた。特に、認知機能の「記憶」、「言語理解」、「注意」、「知覚」、「推論・判断」と学習のつまずきとの関係について述べられた。

V. 本大会への参加を通して

本大会では、非常に多くの教育・心理・福祉・医療等に携わる専門家や教師、保護者が参加し、大会のテーマである、成人期に視点をおいた発達障害の人の社会参加について有用な情報交換・情報共有が行われた。高等学校における通級による指導の開始を来年度に控え、成人期の発達障害のある人の様子や課題とその取組について、さまざまな分野からアプローチされていることについて知ることができ、

当研究所が果たす役割の重要性や今後の課題について改めて考える機会となった。

特に、この度自立活動の項目として付け加えられた「障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること」に関わる、「自己理解」、「自分の行動を調整すること」や「自ら環境に働きかけること」等は成人期の大きな課題にもなっており、子供の発達段階に応じて、継続した支援の取組が必要だと感じられた。

最後に、有意義なプログラムの企画や会場運営を行っていただいた日本LD学会及び大会実行委員会の皆様に厚く御礼を申し上げる。

引用文献

- 梅永雄二(2017). 発達障害の人が大人になって幸せになるためにーライフスキルの支援をー. 日本LD学会第26回大会論文集.
- 梅永雄二・山岡修・西村優紀美・井口修一・志賀利一・Laura Klinger(2017). 発達障害の人の社会参加ー大人になって幸せになるためにー. 日本LD学会第26回大会論文集.
- 小野次朗・岩田聡・比嘉展寿・西村優紀美・柘植雅義(2017). 高等学校における特別支援教育ー多様な支援実践から高校段階のニーズを考えるー. 日本LD学会第26回大会論文集.
- 司城紀代美・新井英靖・岸野麻衣(2017). 特別支援教育の視点を活かした授業づくり. 日本LD学会第26回大会論文集.
- 日本LD学会(2017a). 一般社団法人日本LD学会ホームページ.
<http://www.jald.or.jp/> (アクセス日, 2017-11-25)
- 日本LD学会(2017b). 日本LD学会第26回大会論文集.
- 浜田寿美男(2017). 発達障害のある子どもの育ちー共に生きるかたちから見える育ちの必然ー. 日本LD学会第26回大会論文集.
- 宮口幸治・井阪幸恵・閑喜美史・島田敏行・松浦直己・石附智奈美(2017). 学校における認知機能向上のためのシステム導入ーコグトレ(COGET)を使った学校支援ー. 日本LD学会第26回大会論文集.
- 柳田邦男(2017). 絵本と子どもの心の発達ーデジタル化社会に溺れないためにー. 日本LD学会第26回大会論文集.